

○回想・大通り・交差点・二年前（夜）

一人称視点で歩いている。
黄色い光の点滅。
息遣いだけが聞こえる。
ぼやけた視界が少しずつはっきりして
いく。
人混みが見え、掻き分けて前へ。
電柱に衝突している車。

○総合病院・精神科・診察室・現在

医師（40代）「そうだった夢は頻繁に？」

看護師の吉浦和華（27）、はっとわれ
に返る。

雪村澄（32）、俯いている。

澄「夢：、そうですね。手術してからずつ
とです」

医師「医師、カルテを書きながら、
医師「そうですね。移植後によくみられる症
状です。念のため睡眠薬を出しておきます
ね。規則正しい食生活と軽い運動を心がけ
てください。それで眠れるようなら飲むの
をやめていいですから」

和華、澄を見ている。

× ×

和華、アルコール消毒を持ってくる。
和華、荷物入れにかばんが残っている
のに気づく。

和華「先生」

医師（見て）あ、雪村さんのだ。悪いけど届
けてもらえる？」

和華「はい」
和華、かばんを持って診察室を出る。

○同・廊下

澄、歩いている。

和華「雪村さん」

澄、振り返る。

和華「澄に追いつく和華、かばんを差し出す。

澄「あ、忘れてますよ」
澄「あ、すみません」

澄、かばんを受け取る。
和華「いえ、ではお大事に」

澄「吉浦さんも」
和華「え」と振り返る。

澄、会釈をして歩いていく。

和華、澄を見ている。
タイトル【Dear Ling】

○回想・マンション・リビング・二年前（夜）

ソファーに座ってドラマを見ている和華（25）と滯（25）。

和華「ねえ滯、どうしてお大事になって言われて、あなたもって返すの？」

滯「同じものを返してただだよ。優しくしてくれた人には優しくするでしょ？ それと同じ」

和華「（笑って）えー？」

滯「え、変？」
和華「変だよー。そんなこと言うの滯だけだよ」

○同・現在（夜）

和華、電気をつける。
片づいたリビング。

和華、滯の部屋の戸を開ける。
中は暗い。

和華「：：：今日、滯と同じことを言う人が居てね」

返事はない。

和華「：：：やっぱり：：：」
口をつぐむ和華、戸を閉める。

× × ×
食卓の上に二人分の夕食。

テレビではドラマをやっている。
夕食を食べる和華、テレビを見ない。

× × ×
和華、手つかずの夕食にラップをかけて冷蔵庫にしまう。

冷蔵庫の中に牛乳が三本。

○高層マンション・澄の部屋

画材や本が多い部屋。
風でカーテンが揺れる。

机に向かっていている澄、漫画のネームを
描いている。

インターフォンが鳴る。
澄、顔を上げる。

× × ×
熊居（35）、ソファアームに座る。

熊居「お元氣そうですね。あ、これよかった
ら。復帰祝いです」

澄、熊居、紙袋を差し出す。
澄、受け取る。

澄「ありがとうございます。その節はご迷惑
をおかけしました」

熊居「いやいや何を言うんですか。先生のお
体が一番です。その後は？ 何ともありま
せんか？」

澄「おかげさまで。今度編集長に改めてご挨拶
を——」

熊居「いいですよ。話が長くて帰れな
くなりまして。俺が元氣でしたって伝えて
おきますんで、読み切りの進捗はどうです
かい？」

澄「ちょうどネームができたところですよ
か？」

熊居「おっ、じゃあさっそく見させていた
だきます」

× × ×
澄、紅茶を机の上に置く。

熊居「ああ、ありがとうございます」

熊居「熊居、見て「おや？」と。

澄「熊居「コーヒーやめたんですか」

熊居「お医者さんに言われました？ 先生、
完全にカフェイン中毒でしたからね。この
まま」

澄「……」

澄、紅茶を見る。

熊居「うん、いいですね。このままいきましよう。腕鈍ってないですね、さすがです」
澄「ほっとしてほほ笑む。」
× × ×
澄「キッチン戸棚を開ける。」
大量のコーヒー豆とフィルター。
取り出す澄、どうしようか悩む。
澄「ふらっと立ち上がる。」

○スーパー・店内

和華「買い物かごに牛乳を入れる。」
通路の真ん中に牛乳を持って立っている人（澄）が居る。
周りの客が迷惑そうにその人（澄）を見て通り過ぎる。

和華「すれ違いざまに顔を見る。」

和華「澄だと気づいて、」

和華「雪村さん？」

澄「われに返る澄、和華を見る。」

澄「あ、えっと……吉浦さん」

和華「澄を通路の端にやりつつ、」

和華「どうしたんですか？ 具合でも悪いんですか？」

澄「いや、何をしに来たのか忘れてしまっ」

和華「澄が持っている牛乳を見る。」

澄「同じように見る。」

和華「買物に来たのでは？」

澄「あ……でも僕、自炊しないんですよ。」

飲むわけでもないですし」

和華「はあ……」

澄「でもまあ、買わないといけない気がする

ので買ってきます」

澄「レジへ。」

和華「腑に落ちない。」

○同・駐車場

和華「荷物を助手席に乗せる。」

和華「バス停に澄が居るのに気づく。」

和華「「え」と眉を寄せる。」

和華、澄の元へ。

○バス停
和華「何をしているんですか？」

澄「どれに和華に気づき、にこっと笑う。」

澄「バスには乗れないのかわからなくて」

澄「あ、だめでした」

和華「和華、ため息をつく。」

澄「え」

和華「住所くらいは覚えてますよね？」

澄「でも……」

和華「……」

澄「……」

和華「……」

○スーパー・駐車場

和華「荷物があるので後ろに」

澄「けど、僕は――」

和華「怖いのは知ってます。けどあそこに居

ても帰れませんよ。それ持って歩きます

か？ 澄、距離によつては悪くなりますよ」

和華「目をつぶるか空でも見ててください。

少しでも気分が悪くなったら休憩しますか

ら」

和華、澄を押しこみ、ドアを閉める。

○和華の車・車内

和華「澄、うずくまっています。」

澄「澄、顔を上げて。」

和華「何か、話をしてくれませんか」

澄「気が紛れるので」

和華「……」

澄「……」

和華「……」

澄「……」

和華「……」

澄「……」

和華「……」

澄「……」

和華「……」

澄「……」

和華「……」

澄「……」

和華「……」

澄「……」

和華「……」

澄「……」

和華「……」

澄「……」

和華「……」

澄「紅茶」
和華「お好きですか？ 紅茶。ハーブティーも調合してくれるので、よかったですよ」
澄「みて下さい。不眠にも効きますよ」
澄「いいですね。ミルクティーとか」
和華「ほほ笑む。合わせてほほ笑む。」

○高層マンション・前（夕）
和華の車が停まる。

○和華の車・車内（夕）
和華「着きましたよ」

返事が無い。
和華「振り返る。」
澄「外を見ている。」

和華「雪村さん？」
澄「はっとする澄、シートベルトを外す。」
澄「ありがとうございます」
澄「車から降りる。」

○高層マンション・前（夕）
和華「車を出す。」
澄「和華の車を見ている。」

○総合病院・精神科・診察室
医師「車に乗れたんですか、いいですね。じやあ夢も？」
澄「見なくなりました。薬を飲まなくても眠れます」

医師「よかったです。睡眠は大事ですから」
澄「和華をちらつと見る。」
和華「？」
× × ×

和華「またかばんが残っている。」
和華「アルコール消毒を持ってくる。」

○同・廊下
和華「雪村さん」

澄、振り返る。

和華「また忘れてますよ」

澄「すみません」

澄、受け取る。

澄、和華を見る。

澄「あの、また車に乗せてもらえませんか？」

和華「……はい？」

澄「吉浦さんの車になぜ乗れたのか知りたい

和華「すみませんけど、患者さんと深く関わ

澄「でもないように規則で決められているんです」

和華「昨日は昨日です。ああするしかなかつ

たので。それでは、お大事に」

澄、和華の診察室に戻ろうとする。

澄「出先でかかる食事などの費用は僕が全部

和華「私がお金に困っているように見えます

澄「……見えません」

和華「そうです困ってないです。では」

澄「あっ待ってください」

和華「仕事がありますので」

澄「……」

○同・ロツカールーム（夕）

ため息をつく和華、ロツカーを開ける。

鴨田（33）とありさ（25）、和華を

見る。

鴨田「なあに和華ちゃん。変な患者さんで

和華「あたった？」

ありさ「ああいや……。まあ、そうですね」

和華「ありさちゃん、おじいさんに人気だも

んね」

ありさ「精神科って大変ですよね」

和華「……」

鴨田「……」

ありさ「……」

和華「……」

ありさ「……」

和華「……」

ありさ「……」

和華「……」

ありさ「そこでモテたくないんですけどねー」

ありさ、化粧直しをする。

和華、帰り支度をする。

鴨田「ねえ、和華ちゃんって今週末空いてる？

合コンのメンバーが足りなくてさ」

ありさ、慌てて、

ありさ「あつ鴨田さん私、私空いてます！」

鴨田「え、でも彼氏ー」

ありさ「別れました」

鴨田「はっや」

和華「私はいいです。お先に失礼します」

ありさ「お疲れさまですー」

鴨田「お疲れー」

和華、部屋を出る。

ありさ、しぼらく様子を見て、

らだめですよ」

鴨田「でもそれ二年ぐらい前でしょ？」

ありさ「今でも誘い全部断ってるんですけど。

同棲もしてみたみたいですし、相当好きだっ

たんですよ」

鴨田、ドアを見て、

鴨田「もうそろそろ忘れてもいいと思うけど

なあ」

○同・裏（夕）

裏口から出てくる和華、歩きながら車

の鍵を出す。

和華、バス停にぼつんと人（澄）が居

るのに気づく。

その人（澄）が和華の方へ向かってく

る。

和華、澄とわかり、顔をしかめる。

澄「お帰りですか？」

和華「何でまだ居るんですか」

澄「バスで帰ってみようかと」

和華「帰ってないですよね……」

澄「そうなんです。気分が悪くなっちゃっ

て」

和華、ふと気になり、

和華「……あの、いつもどうやってここまで？」

澄「歩いて来てます」

和華「歩いて!?」結構な距離ありますよね」

澄「職業柄、運動不足になりがちなので。い

い機会ですし」

和華「そう、ですか……」

澄「車、やっぱり乗せてはくれませんか」

和華「眉を寄せる和華、ため息をつく。

和華「個人的な要望を聞くために私たちが居

るわけじゃないです。やむを得ない事情も

ないですし、諦めてください」

澄「メリットがないからですか？」

和華「そうですね。メリットも義務も慈悲も

ないです」

澄「笑う。

澄「言いますね。面白いなあ」

和華「あの、次こういう事したら警察呼びま

すからね」

澄「驚く澄、すぐに気づいて、

澄「あ、そっか待ち伏せ……。すみません、

和華「これじゃストーカーですね。もうしません」

和華「わかってもらえればいいです。では、

お大事に」

澄「和華、駐車場へ。

澄「吉浦さんも」

澄「立ち止まる和華、振り返る。

澄「携帯で地図を見ている。

× × ×

× × × フラッシュバック。

× × × ドラマを見ている濡の横顔。

× × ×

澄「立体駐車場の方へ。

和華「……」

澄「澄を追う和華、前に立つ。

澄「？」

和華「……今日、限りです」

澄「！」

○和華の車・車内（夕）

澄、後部座席に座っている。

澄「助手席はだめなんですか？」

和華「大事な人の席なので」

澄「そうですか、残念」

和華「信号で止まる。」

澄「不思議なくらい何ともないです。けど、

一応お話してもらっても？」

和華、「めんどくさいなあ」と。

和華「…お仕事は何を？」

澄「漫画家です。吉浦さんは漫画を読みますか？」

和華「まあ、それなりに。どんなのを描いているんですか？」

澄「あー…。【人魚は雪の夢を見る】って—」

和華「えっ！？」

和華「振り返る。」

澄「あ、知りませんか」

和華「知ってますよ！ 人魚って、あれですよね！？」

和華「前方を指さす。」

澄「体を乗り出して見る。」

ビルの電光掲示板に【実写映画化！】とPVが流れている。

澄「あーそういえばそうでしたね」

和華「そういえばそうでしたね！？」

信号が青に変わる。

澄「気づいて、

澄「青ですよ」

和華「慌てて車を出す。」

澄「外を眺めている。」

和華「ルームミラーで澄をちらちら見る。」

○高層マンション・前（夜）

和華の車が停まる。

○和華の車・車内（夜）

澄「ありがとうございます」

和華「あ、シートベルトを外す。」

和華「あの」

澄「はい」

和華「……えっと」

澄「ああ、大丈夫です。もうつきまどったり
しません。いいネタや資料になると思いま
すが、警察のお世話になるのはよくないで
すから」

和華「いや、そうじゃなくて……」

澄「？ はい」

和華「……その、雪村さんって本当にあの、
人魚の……」

○高層マンション・澄の部屋（夜）

和華「ソファーに座って原稿を見てい
る。」

和華「本物だ……。すごい！ 本当だったん
です」

澄「キッチンに居る澄、紅茶を淹れながら、
嘘をついてどうするんですか」

和華「見栄を張る方も居るじゃないですか。
若いころ、大統領をやっていたと言うご老
人に何度もお会いしました」

澄「それ、笑う。」

和華「笑う。」

和華「表紙の【ゆきむらすみ】を見る。」

和華「気づかないものです」

澄「僕のことを女性だと思っている方が多い
そうですから」

和華「私もそう思っていました」

澄「紅茶を持って和華の元へ。」

澄「いつから読んでくれてるんですか？」

和華「デビュー作の【まじないとコーヒー】
からです」

澄「驚く。」

澄「【ひだまりもよう】も？」

和華「もちろんです。打ち切りになっちゃい
ましたけど、すごく好きでした」

澄「もしかして、それで看護師に……？」

和華「……そうです。今でも雑誌の切り抜き

を大事に持ってます」

澄「嬉しくて笑う澄、紅茶を机に置く。」

和華「その原稿もありますよ。見ますか？」

澄「あー」

和華「ありましたよ、メリット」

澄「まだ諦めてなかったんですか」

和華「そう、原稿を探しながら、使えるものは使おうという

魂胆です」

和華「：：」

和華「紅茶を飲む。」

澄「美味しくない。僕は全部保管するタイ

プなので、ボツになったネームや設定資料

とか、あとデビュー前の原稿もあります」

和華「！」

澄「にっこり笑う。」

○同・前
和華の車が停まる。

○和華の車・車内
澄「後ろ座席に乗りこむ。」

和華「よろしくお願ひします」

澄「ドライブでもいいんですけれど、せっかく

なので本屋に行きたいです。大きい所の」

和華「わかりました」

和華「車を出す。」

○本屋・外観
三階建てのビル。

○同・店内
澄、芸術書コーナーで建物の写真集を

見ている。

やってくる和華、澄が見ている本を覗く。
和華「今時、ネットでいくらでも見れるじゃないですか」
澄「写真集を見たまま。」
和華「吉浦さんは電子書籍派ですか？」
澄「専門書は電子です。けど、雪村さんの漫画は紙で買ってます」
澄「和華を見る。」
和華「どうして？」
澄「：：手元に置いておきたいので」
澄「：：ほほ笑む。」
澄「そういうことです」
○カフェ・店内
和華「ソファー席に座って写真集を見ています。」
澄「紅茶と軽食を運んでくる。」
和華「お待たせしました」
澄「ありがとうございます」
和華「和華の向かいに座る。」
澄「和華、写真集を袋に入れて澄の方へ。」
澄「紅茶を和華の前に置く。」
和華「この後どうしましょう」
澄「僕、この後は終わってしまったのですが、和華、紅茶を飲む。」
澄「和華、紅茶を飲む。」
澄「乗れるようになったと言ってもその理由はわかっただけですし、長距離の運転は吉浦さんに負担をかけてしまうので」
和華「そうですか。じゃあ家まで送りますね」
澄「紅茶を混ぜる。」
澄「原稿はどこ見ますか？」
和華「毎回見せてくれるんですか」
澄「お礼ですから。僕としては紛失や流出を防ぐために公の場を避けてくれるとありがたいです」
和華「なら雪村さんの家が安心ですね」
澄「いいんですか？」

和華「送るんですからその方がスムーズです。
お気遣いはありがたいですが、もうすでに
一回お邪魔してるので」
澄「それでした」
澄、紅茶を飲む。

○高層マンション・澄の部屋（夕）

澄、仕事用の椅子に座り、写真集を見
ている。

澄、時計を見る。

時刻は十八時前。

澄、和華を見る。
原稿を見ている和華、頬が緩んでいる。

澄、嬉しくて頬が緩む。

× × ×
インタフォンが鳴る。

和華、はっと顔を上げる。

澄、玄関へ行き、対応する。

澄「お腹、空きませんか？」

和華「え」

和華「すみません居座っちゃって」

澄「どれだけ居てもらっても構いませんよ。

適当に頼んじやいましたけど嫌いなものあ
りますか？」

和華「特に、ないです」

澄「よかった」
澄、和華の向かいの床に座る。

澄「食べましょうか」

× × ×
中華料理が並ぶ。

澄、取り皿にシューマイや餃子を盛っ
て和華に勧める。

和華、勧められるまま食べる。

美味し。澄、嬉しくてさらに勧める。

× × ×
空になっていく容器。

澄「何をそんな真剣に見ていたんですか？」
和華「何をって、：：大好きな漫画の原稿が
澄「あれば誰でもじっと見ます」
和華「でも漫画は持っているんですよね」
澄「それでまた別です」
和華「そうですか？」
和華「本物の絵画と教科書に載っている絵画
澄「は別物ですよ」
和華「あー」
和華「そういうことです」
澄「笑う。」
和華「何か」と澄を見る。
澄「吉浦さんって本当に僕の漫画が好きなん
だなと」
和華「好きですけど」
澄「ありがたいです」
和華「ごみを捨てる。」
澄「お湯が沸く。」
澄「紅茶でいいですか？」
澄「戸棚を開ける。」
和華「雪村さんも？」
澄「？はい」
和華「和華、コーヒー器具を見る。」
澄「あれは使わないんですか？」
澄「ああ、前はよく飲んでましたけど、今は
全く」
澄「和華、ティーバッグを取り出す。」
和華「代わってください」
澄「え、座っていいですよ」
和華「言いくいんですけど、雪村さんの淹
澄「れた紅茶は美味しくないです」
澄「えっ」
和華「やかんから水蒸気が上がり続ける。
和華、火を止める。」

和華「手を抜いてもそれなりのものができるはずなのに」

澄「そうなんですね……」

和華「座ってテイーバッグを取り上げる。」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

澄「……」

○マンション・リビング（夜）

慌てて帰ってくる和華、テレビをつける。

ドラマは途中から。和華、やってしまったと後悔。

○病院近くの紅茶専門店・外
通りがかる澄。

澄、見て店に入る。

○総合病院・廊下

澄「そういや、ドラマ間に合いました？」

和華「？ ああ、見るのは私じゃないので」

澄「と、言うところ」

和華「それよりいい加減にしてもらえますか？」

和華「紙袋を掲げる。」

澄「いやあすみません。それはそうと、今日

の夜は空いてますか？」

和華「はい？」

澄「ティーカップを買ったんです。それで美

味しい紅茶を飲んでみたいな、と」

和華「……」

和華「紙袋を澄に押しつける。」

澄「受け取る。」

和華「今は、仕事なので」

○喫茶店・店内（夕）

澄「目の前の紅茶をじっと見る。」

和華「美味しいですよ。ここ」

和華「紙袋を見て、和華を見る。」

和華「紙袋を置く。」

和華「紙袋を置く。」

和華「紙袋を置く。」

和華「紙袋を置く。」

和華「紙袋を置く。」

和華「紙袋を置く。」

和華「紙袋を置く。」

和華「紙袋を置く。」

和華「紙袋を置く。」

和華「紙袋を置く。」

和華「紙袋を置く。」

和華「紙袋を置く。」

和華「紙袋を置く。」

和華「紙袋を置く。」

和華「紙袋を置く。」

和華「紙袋を置く。」

和華「紙袋を置く。」

和華「紙袋を置く。」

和華「紙袋を置く。」

和華「紙袋を置く。」

和華「紙袋を置く。」

和華「紙袋を置く。」

和華「紙袋を置く。」

和華「紙袋を置く。」

和華「紙袋を置く。」

和華「紙袋を置く。」

和華「紙袋を置く。」

和華、呆れる。

○和華の車・車内（夜）

和華、高層マンションの前で車を停める。

澄「吉浦さんが好きな紅茶は何ですか？」

和華「アールグレイが好きです」

澄「それはまた違うんですか？」

和華「今度持って来ます。飲めばわかりますよ」

澄「ありがとうございます。じゃあまた今度」

澄、車を降りる。

和華、紙袋が残っているのに気づく。

和華、窓を開けて、

和華「また忘れてますけど！」

澄、振り返る。

和華、紙袋を見せる。

澄「忘れてませんよ。吉浦さんなんです」

澄、高層マンションに入っていく。

和華「……」

○マンション・リビング（夜）

和華、手つかずの夕食にラップをかける。

携帯に瑞樹（27）から着信。

和華「（出る）もしもし、瑞樹？」

瑞樹（声）「和華ー、久しぶり。元気？」

和華「元気だよ。どうしたの？」

和華、食卓に座る。

瑞樹（声）「あのねー、実は結婚することになった」

和華「えっおめでとう！」

瑞樹（声）「ありがとー。それで、よかったら

式に来てくれないかなって」

和華「行くよー。行くに決まってるじゃん」

瑞樹（声）「よかったー。じゃあ招待状送るね。

住所ってー」

和華「あ、変わってる。今送る」

和華、通話をスピーカーに切り替えて住所を打ちこむ。

瑞樹（声）「もしかして彼氏と？」
和華「……。違うよー。職場に近いってだけ」
瑞樹（声）「そっか、看護師だったもんね」
和華「そうそう、送った」
瑞樹（声）「ありがと。じゃあまた連絡する」
和華「待ってる。じゃあね」
和華、電話を切る。
和華、ラップをした料理を冷蔵庫に入
れる。
× × ×
和華、皿洗いを終える。
携帯に着信。
和華、画面を見る。
画面には【母】と表示されている。
和華、「うわ」と顔をしかめる。
悩む和華、渋々電話に出る。
和華「はい」
和華の母（声）「ねえちよつと瑞樹ちゃん結婚
するって」
和華「知ってるよ」
和華の母（声）「何だ知ってるの。アンタもそ
ろそろどうなの。彼氏は？ 居るの？」
和華、「うんざり」と。
和華「仕事が忙しいから」
和華の母（声）「そんなこと言って、嫁に行き
遅れたらどうするの」
和華「あのさあー」
和華の母（声）「もう、女の人が好きとか変な
こと言っていないで早く結婚しなさい。ルー
ムシェアしてた人、亡くなったんでしょ？
ならそこに居る必要ないんだから、早く引
越して、良い人連れて来てよ」
和華、口を開くがぐつとこらえ、
和華「宅配来たから切る」
和華の母（声）「あっねえ！」
和華、電話を切る。
和華、深い溜息。
和華、顔を上げ、深呼吸。
食卓に置いてある紙袋に気づく。
和華、食卓へ。

袋を開ける和華、ガラスのティーカップが出てくる。
眺める和華、朗らかな顔に。
和華、キッチンへ行き、戸棚を開ける。
白や緑、二つそろった青いティーカップなどが並んでいる。
和華、紅茶の器具を出す。

○高層マンション・澄の部屋

和華「ティーサーバーの中で茶葉が踊る。」

澄「ごく可愛くて使いやすかったです」

澄「よかった。吉浦さんに似合うだろうなって思っていたので」

澄、戸棚から青いカップを出す。

和華、見て驚く。

× × ×

回想、フラッシュバック。

紅茶専門店。

漣、青いティーカップを手取る。

漣「これにしよう」

漣「お揃い」と笑う。

× × ×

澄「綺麗でしよう。つい惹かれてしまって」

澄、カップにお湯を注ぐ。

澄を見ている和華、涙がにじむ。

和華「聞きたいことがあるんですけど」

澄「何でしよう」

澄、カップのお湯を捨てる。

和華「：：雪村さんはどうして、お大事に、

に對してあなたもと返すんですか？」

澄「そうですね：：」

澄「優しくしてくれた人に優しくするのは同じです」

和華、泣くのを堪える。

澄、紅茶をカップに注ぐ。

澄「やっぱり変ですかね。前にそう言われた

ことがあって」

和華「そんなこと言うの一人しかいませんけ

ど、らしくていいんじゃないですか？」

澄「あ、いい香り」

× × ×

澄、漫画を描いている。

和華、原稿を見ている。

澄「時間、大丈夫ですか？」

澄「和華、顔を上げろ。」

澄「前にドラマがどうとか」

和華「まだ居てもいいですか？」

澄「：僕は構いませんけど」

和華「ほほ笑み、原稿に戻る。

澄、漫画に戻る。

澄、ドラマが気になってくる。

澄、テレビをつける。

和華「気がつく。」

澄「あ、いいですか。気になって」

和華「はい」

ドラマが始まる。

澄、ドラマを見ている。

和華、澄を見ている。

澄に濡の面影が重なる。

和華、濡を見ている。

○動物園・前
和華の車が入っていく。

○同・園内
和華「和華、パンフレットを広げる。

澄「僕もです。何だかワクワクしますね」

× × ×

水に打たれているサイ。

澄、写真を撮る。

和華「サイを見ている。

澄、和華の写真を撮る。

驚く和華。

和華「何で撮ったんですか」

澄「資料です」

澄「資料です」

和華、むっとする。
 澄、また撮る。
 和華、携帯を出し、澄を連写。
 澄、驚く。
 和華、笑う。
 × × ×
 カフェスペース。
 澄「適当でいいですか？」
 和華「あ、じゃあー」
 澄「いいですよ。運転してもらっているのだから、吉浦さんが持ってきてくれた紅茶、あれ少し分けてください」
 和華「あれですか？」
 澄「凄く好きだったので」
 和華「……。わかりました」
 澄、椅子に座る。
 澄、携帯を机に置く。
 和華「写真、見てもいいですか？」
 澄「いいですよ」
 澄、携帯を和華に渡して売店へ。
 和華、澄が撮った写真を見る。
 動物や建物の写真、それら全てに和華が映りこんでいる。
 和華「……」
 澄、澄を見る。
 澄、会計をしている。
 和華、携帯を出して澄を動画撮影。
 澄、軽食を持ってやって来る。
 澄「？」
 澄、とりあえずピース。
 和華「動画です」
 澄「(笑って) 何ですか」
 × × ×
 澄、キリンの写真を撮っている。
 澄、振り返って和華を撮る。
 和華、「また」と笑う。

○高層マンション・澄の部屋

澄、漫画を描いている。
和華、紅茶を机に置く。
澄、顔を上げる。
和華、ほほ笑む。
澄、ほほ笑む。

○漁港（朝）

澄、写真を撮る。
和華、寒くて震える。
澄の足元にカニ。
澄、カニを和華に見せる。
和華、カニを見る。
澄、和華を見ている。

○マンション・リビング
食卓の上に結婚式の招待状。

○高層マンション・澄の部屋

ある。
熊居、動物園のお土産を見ながら、
居「先生変わりましたね。前は最低限の外
出しかしなかったのに。いいですね、健康
的ですよ。何かきっかけが？」
澄「克服もかねて色々？」
熊居「あれ出してくれる人が居るんですね。
あ、もしかして：：？」
澄「熊居さんが考えているような関係ではな
いですよ」
熊居「またまたあ」
澄居「熊居さんはどうしてご結婚を？」
澄居「えっ」
澄「そういえば聞いてなかったな、と」
熊居「ネタになるような話ではないですよ。
嫁さんとは幼稚園染みで心地いいな」とし
か思っただけです」
熊居「熊居、照れくさくて頭をかく。
居「でもまあ、誰かにとられたくないって
思っただけです。知らない奴

が嫁さんに触れるとかね、嫌だなーって、子供っぽい嫉妬心ですよ」

澄「真剣に聞いています」

熊居「熊居、恥ずかしくなり、お土産もありがとうございました」

熊居「原稿、お預かりしますね。お土産もありがとうございました」

澄「いえ」

熊居「玄関へ向かう熊居「あ」と立ち止まり、

熊居「そういやデジタルに移行する話、考えていただけでした？」

澄「紙がいんですよー」と思い出し、

熊居「みなさんそう言うんですよー」

澄と熊居、笑い合う。

○電気屋・店内（日替わり）

和華「それで断れなかつたんですか」

澄「断ろうとしたんですけど、知らないまま拒否するの、変だと思いましたが」

和華「なるほど、確かにそうです」

和華「和華と澄、店内を歩く。

和華「和華と澄、店内を歩く。

和華「和華と澄、店内を歩く。

和華「和華と澄、店内を歩く。

和華「和華と澄、店内を歩く。

和華「和華と澄、店内を歩く。

和華「和華と澄、店内を歩く。

澄「受け取り、試し描きをする。

画面に描かれる漫画のキャラクター。

澄「楽しくなってる。キャラクタ。

いつの間にか人が周りに集まっている。

気づく澄、驚く。

○同・駐車場

澄「和華、液晶タブレットを運ぶ。

和華「和華、液晶タブレットを運ぶ。

澄「和華、液晶タブレットを運ぶ。

和華「和華、液晶タブレットを運ぶ。

澄「和華、液晶タブレットを運ぶ。

和華「和華、液晶タブレットを運ぶ。

澄「和華、液晶タブレットを運ぶ。

和華「和華、液晶タブレットを運ぶ。

澄「和華、液晶タブレットを運ぶ。

和華「和華、液晶タブレットを運ぶ。

澄「和華、液晶タブレットを運ぶ。

和華「和華、液晶タブレットを運ぶ。

澄「和華、液晶タブレットを運ぶ。

澄「大歓迎です」

澄「助かります」

和華「そういや、来月カラーを開ける。楽しみにしてます」

澄「そこも楽しみなんですか」

和華「好きですから」

○和華の車・車内

和華「和華、シートベルトを締めつつ、

澄「結婚式ですか」

和華「結婚式です」

澄「結婚式で予定だったカフェはまたの機会に」

澄「それ、僕も行くというのは」

和華「和華、「本気？」と澄を見る。

澄「すね」

和華「資料になるんです」

澄「あ、ドレスは僕が決めていいですか？」

和華「何ですか嫌ですよ。サイズだって知らないでしょ」

澄「色とかアクセサリーとか、そのイメージだけでも」

和華「何で食い下がってくるんですか。嫌だ

澄「それだけでもいい資料になるんです」

和華「もう決めました！」

澄「まだ間に合いますよ」

○総合病院・精神科・診察室

医師、カルテを書きながら澄に話をし

ている。

澄、和華をちらちら見る。
和華、小さく首を振る。

○同・廊下
澄「色とか形だけでもー」
和華「だめです」
和華、かばんを渡す。

○マンション・リビング（夜）
携帯にメッセージが何件か届く。
一人分の夕食を置く和華、携帯を見る。
澄からドレスのサイトが送られてきている。
和華、笑う。
和華、【やれやれ】とスタンプを送る。

○高層マンション・澄の部屋
熊居「どうしてそんなに見たかったんですか？」
熊居、液晶タブレットの設定をする。

澄、見ている。

澄「いい資料になるので」

熊居「何だ、てっきり不安なのかと」

澄「不安になるようなことが？」

熊居「？ 結婚式って出会いの場じゃないですか」

澄「……」

液晶画面に【エラー】の文字。

熊居「おっかしいな。合ってるはずなんだから」

× × ×
澄、机に向かっていているが作業が進んでいない。

澄、携帯で和華に、

澄の声「『写真だけでもいただけませんか』と送る。

返信が来る。

澄、見る。

和華の声「『嫌です』」

澄の声「『そこをなんとか』」

和華、【ダメ】とスタンプ。
澄、悩み、

澄の声「『場所は？』」

澄、【会いに行ってもいいですか？】と
打って止まる。

澄「……いやいや」

澄、消そうとする。

インターフォンが鳴る。

驚く澄、携帯を置いて玄関へ。

澄、宅配を受け取る。

戻ってくる澄、和華からの返信に気づく。

さっきのメッセージが送信されている。

澄「えっ」

和華の声「『駅前のホテルです』」

和華、追加で【やれるものならやってみな】とスタンプ。

澄「……」

○ 駅前・ホテル・チャペル
扉が開いて瑞樹と父親が入場。

和華、拍手。

瑞樹の父親が泣いている。

和華「……」

○ 同・披露宴会場

和華、瑞樹たちと写真撮影。

× × ×
和華、友達と話をしている。

会場の照明が暗くなり、瑞樹と新郎に
ライトが当たる。

両家の両親が前に立っている。

瑞樹、両親へ手紙を読む。

瑞樹の両親が号泣している。

和華、目を伏せる。

○ 高層マンション・澄の部屋

澄、漫画を描いている。

澄、手が止まり、時計を見る。

○ 駅前・ホテル・外（夕）

ぞろぞろと人が出てくる。
その中に和華。

友達 1 「二次会すぐそのバルだって」

和華 「ごめん、輪から離れ、

友達 2 「えっ帰るの？」

新郎の友達 1 「せっかくだし行きましょうよ」

和華 「明日仕事なので」

新郎の友達 2 「看護師でしたよね、すごいな
あ。俺も面倒見てもらいてー」

みんな、笑う。

和華、少し引く。

友達 1 「ちなみに和華、今フリーですよ」
新郎の友達 1 「えっじゃあ、ぶっちゃけどっ

ちが好みですか」

新郎の友達 1、自分と2を交互に指を
さす。

和華 「えっと……」

新郎の友達 2 「どっち？」

新郎の友達 1 「正直、マジでタイプです」

新郎の友達 2 「俺も俺も」

和華 「どうしよう」と。

澄 「和華さん」

和華、振り返る。

澄が立っている。

みんな、澄を見ている。

澄、和華の手を取り、歩き出す。

和華、引かれるまま歩く。

和華の友達 1 と 2、はしやぐ。

○ 同・大通り（夕）

歩く澄、ふと立ち止まって振り返る。

澄 「あの人は恋人ですか？」

和華 「……、違い、ます」

澄、ほっと息をつく。

澄 「よかった……。とても失礼なことをして

しまったのかと」

和華 「……いえ、困っていたので助かりました」

澄、和華をじつと見る。
いつもと雰囲気が違う和華、ドレスを
着てセットされた髪、揺れるアクセサ
リ―。
澄「綺麗ですね」
和華「え」と顔を上げ、夕日に気づく。
澄「そうですね」
和華「そうですね」
澄、和華を見ている。
和華「ふと、
和華「雪村さん、どうやってここまで……？」
澄「タクシ―で」
和華「……乗れたんですか」
澄「乗れました」
澄「ぱつと笑顔になる和華、だんだんと笑
顔が消えていく。
和華「それは、よかったです。じゃあもう私
がお手伝いすることはない、ですね……」
澄「……」
和華「……」
和華、繋いでいる手を見る。
澄、手を見る。
澄、手を離そうとしない。
和華「澄を見て、
和華「あの……（手）」
澄「……」
和華「雪村さん？」
澄「和華を見る。
和華「その（手を）」
澄「すみません」
和華「いえ」
澄「離したくないです」
和華「え」と。
目が合う和華と澄。
一瞬、澄と濡が重なる。
濡、同じように和華を見ている。
澄「吉浦さん、僕は――」
和華「――」
和華、澄の手を振り払う。
和華、後退り、そのまま去る。
追えない澄、和華を見ている。

○マンション・リビング（夕）
帰ってくる和華、へたりこむ。

○総合病院・精神科・診察室

医師、澄と話す。

澄、和華を見ない。

和華、澄を見ない。

× ×

× ×
医師、カルテを書いている。

和華、アルコール消毒を持ってくる。

荷物入れは空。

和華「……」

和華、椅子を拭く。

茶封筒が荷物入れのそばに落ちている。

和華、拾って中を見る。

和華をスケッチした何枚もの絵。

表情や角度、画角が様々。

医師「？ 吉浦さん――」

和華「届けてきます」

医師「あ、うん。よろしく――……」

○同・廊下

和華、澄を探すが見当たらない。

和華、歩きからだんだん駆け足に。

人が居ない通路へ。

角を曲がった先に澄が立っている。

一度通り過ぎる和華、戻って澄の元へ。

澄、うつむいたまま。

澄の前に立つ和華、言葉が浮かばず、

和華「……」

和華、茶封筒を見る。

澄「……僕は――」

和華、澄を見る。

澄「女の人を好きになっただことがないんです」

和華「（驚き）……」

澄「いつも、好きになるのは同性で……」

澄、震える手をぎゅっと握る。

澄「車に乗れるようになることが目的だった

んです。本当に、それだけだったのに……。
いつの間にか、吉浦さんと居るのが楽しく
て……」

澄「……和華を見る。」

和華「……初めて、好きになれるかもと……」

足音が近づいてくる。

和華、澄の腕を引いて空いている病室
へ。
看護師が病室の前を通り過ぎる。

○同・空き病室

光が差しこむ静かな部屋。

和華、澄から手を離す。

澄、和華の腕を掴む。

和華「！」

澄「……」

目をつぶる和華、再び目を開けると前
に滯が立っている。

和華、滯を見たまま、

澄「……女の人が好きなんです」

澄「！」

○回想・澄との思い出・点描

車の中。

和華の声「車に乗せるなんて、正直面倒でし
た」

和華と澄、楽しげに話す。

× × ×

澄の部屋。

和華の声「休みは潰れるし、運転は疲れるし」
澄、紅茶の茶葉をコーヒーマイルに入れ

ようとする。

和華、慌てて止める。

× × ×

動物園。

和華の声「男の人と出かけるなんて嫌で仕方
なかった」

和華の動画撮影画面。

飲み物を飲む澄、カメラに気づいて笑

う。

○総合病院・空き病室
澄「……」

和華「なのに、楽しくて」
滯、ほほ笑む。

和華「このまま好きそうになり、顔を覆う。
なんて……」

澄「好きになっていいですか」

和華「顔を上げる。」

澄「吉浦さんは澄しか居ない。
そこには澄しか居ない。」

和華「……私も、雪村さんを好きになってみ
たいです」

○高層マンション・前
和華の車が停まる。

○和華の車・車内

澄、後部座席に乗りこむ。

和華「あ、こっち（助手席）」

澄「（見る）……」

× × ×
走る車。

澄、助手席に乗っている。

澄「大切な人の席なのでは……？」

和華「そうですよ」

澄「少し間があり、
僕が大切な人になったということですか？」

和華「……そうです」

返事がない。

和華「澄をちらっと見る。」

澄、照れて顔が真っ赤。

和華「自分で言っただくせに！」
澄、笑う。

○本屋・店内

建築コーナー。
和華と澄、隣り合って本を見ている。
澄、和華を見る。
和華、建築雑誌をめくる。
澄、頬が緩む。
気づいて澄を見る和華、にこっとほほ
笑む。

○紅茶専門店・店内

試飲をする澄、首をかしげる。
和華、笑う。

○高層マンション・澄の部屋（日替わり）

澄、コーヒーを淹れる。
膨らむコーヒー豆。
滴り落ちるコーヒーの雫。
× × ×
和華、コーヒーを飲む。
美味しい。
澄、嬉しくて笑う。

○総合病院・廊下（日替わり）

むっとしている和華、澄のかばんを持
っている。
澄、にこにこしている。
和華、つられて頬が緩む。

○美術館・館内（日替わり）

絵を見る和華と澄、話しながら歩く。

○高層マンション・澄の部屋（夕）

和華と澄、餃子を作る。
× × ×

澄「そうだ、ケーキがあるんだお皿。
食卓の上に空になったお皿。」

澄「あ、牛乳……」
澄、キッチンへ行き、冷蔵庫を開ける。

澄「買ってきますね」
澄、振り返って、

澄、玄関へ。
澄の後ろ姿に滯りが重なる。
和華、慌てて澄を引き留める。

澄「？ 和華、すぐ戻りますよ」

和華「行かないでください」

澄「けど、甘い物を食べるときはいつもミルクティーで……」

澄、「あれ」と言葉が途切れ、
澄「いつ聞いたんですっけ」

和華「澄の服を引く。」

和華「なくていいです。水でもなんでもいいので、居なくならないで」

澄「……」

澄「……」

澄「わかりました」
和華「ほっとして力が緩む。」

○同（夜）

澄「……」 和華と澄、暗い部屋で映画を見ている。

澄「……」 時間、大丈夫ですか？」

和華「澄にもたれる。」

澄「和華を見る。」

和華「映画を見ている。」

澄「……」 泊まって、いきますか」

和華「……」

澄「……」

澄「……」 × ×
澄のTシャツを着ている和華、膝を抱

えてテレビを見ている。

澄「洗面所で髪を乾かしている。」

澄「ドライヤーを止める。」

澄「……」

澄「……」
澄「ドライヤーを片づける。」

洗面所から出てくる澄、和華を見る。

和華「テレビを見たまま。」

澄「和華の隣へ。」

澄「……」 和華さん」

和華「澄を見る。」

澄「和華を見る。」

澄「和華を見る。」

和華と澄、ベッドに寝ている。

澄「……」 澄、ぎこちなく和華を抱きしめる。

和華「……」

澄「……あの、変なことを言ってもいいです

か」

和華「？」

澄「潰してしまいそうですごく怖いです」

和華「重くて少し苦しいです」

澄「そうですよね。やっぱり僕はソファで

寝ます」

和華「なら私が」

澄「だめです。和華に布団をかけて寝かす。

わけにはいきません」

澄「何ですか」

澄の顔が真っ赤。

和華、笑い続ける。

○同（朝）

和華、目を覚ます。

和華、起き上がり、ソファへ。

澄、寝ている。

傍に座る和華、目をつぶる。

× ×

回想、フラッシュバック。

和華「和華」

和華、目を開ける。

マンション、和華の部屋。

× ×

目の前に滯が居る。

× ×

和華、目を開ける。

○総合病院・ロッカールーム
和華、ぼんやり突っ立っている。

ありさ「和華さん？」
ありさ「和華、われに返る。」
和華「大丈夫ですか？」
ありさ「うん。大丈夫。ありがとう。」
和華「滯りの部屋を出て行く。」
和華「滯りのメッセージを見る。」
しみ「日常の会話の中に『水族館楽しみ』という言葉。」

○水族館・入口

澄「記念撮影をするカップルや家族連れ。」
澄「パンフレットを広げる。」

和華「好きなんですか？水族館」
和華「好きなのは滯り」

澄「和華、はつとして澄を見る。」
澄「聞こえてなくて、」

澄「？」
和華「：、イルカショーが見たくて」
澄「ショーがあるんですか」

熊居「先生？」
澄「振り返る。」

熊居「偶然です。」
熊居「「やっぱり」と駆け寄る。」

熊居「熊居、和華に気づいて「おや」と。」
熊居「先生を担当している熊居です」

和華「吉浦です。（えっと）」
熊居「なるほど吉浦さんが。連れ出してくれ

てありがとうございます。おかげで先生が健康的になりました。（こそっと）昔は編集

部で夜行性とかドラキュラとか言われてた

んですよ。（戻り）それが今やこんな昼間か

ら外に」
和華「いえ、そんな」

子ども「ぱあー」
熊居「あっすみません。お邪魔でしたね。で

は」
熊居「家族の元へ戻る。」
和華「澄を見てくすつと笑う。」

澄「？」

和華「楽しい方ですネ」
澄「いつも助けられています。この間液晶タブ
レットの接続もしてくれて」
和華「へえ」
駐車場から防犯アラームが聞こえてく
る。

驚く和華と澄。
鳴り続けるアラーム。
澄、顔をしかめ、耳をふさぐ。

× × ×
回想、フラッシュバック。

ぼやけた視界。
点滅する黄色い光。
ハンドルとヒビが入ったフロントガラ
ス。

和華「雪村さん」
澄「われに返る。」
和華「移動しましょう」
和華、澄の腕を引く。

○同・館内

和華「落ち着きました？」
澄「……少し」

和華「……今日は帰りましょうか」
澄「……和華を見る。」

和華「また来ればいいですから」
和華、「ね」とほほ笑む。

○同・駐車場

和華「運転席のドアを開ける。」
澄「ドアを開けられない。」

和華「乗れそうですか？」
澄「……後ろでも……？」

和華「……」
澄、後部座席のドアを開ける。
和華、澄が乗るのを待って乗りこむ。

○和華の車・車内・濤の記憶・点描

走る車。

和華、ルームミラーで澄を見る。

澄、俯いている。

道が悪く、車が揺れる。

澄、耳鳴りがして耳を塞ぐ。

× × ×

車の中、運転席。

散らばったガラス。

チカチカと光るハザード。

× × ×

和華「雪村さん？」

澄、顔をしかめている。

和華「大丈夫ですか？ 休憩しますか？」

澄、耳鳴りで和華の声が聞こえない。

× × ×

ざわざわとうるさい声。

群がる野次馬。

その中に自分の方を見ている和華。

○高層マンション・前

和華「雪村さん」

澄、はっとする。

和華、後部座席のドアを開けて澄を見

ている。

和華「着きましたよ」

澄、和華を見ている。

○同・澄の部屋（夕）

澄、ソファアームに座っている。

澄、ゆっくり目をつぶる。

暗闇の中、微かに人の声が聞こえる。

○大通り・交差点

人が行きかう。

○高層マンション・澄の部屋

澄、机に紅茶を置く。

澄、ソファアームに座りながら、

澄「僕の夢の話、覚えてますか？」

和華「暗闇で人の声が聞こえるって」

澄、頷く。

澄「それが昨日、人が見えたんです。僕は壊れた車の運転席に居て、大勢の人がこっちを見ていた。……その中に……」

澄、和華を見る。

和華、ドキッとすする。

澄「他の人はぼやけているのに、あなただけ、はっきり見えたんです」

和華、目をそらす。

和華「……でも、夢、でしょう？」

澄「僕もそう思っていました。でも、やっぱりおかしいんですよ」

和華「何が……」

澄「僕は免許を持っていないんです。なので、私も、運転席に座るといふ感覚がわからない。なのに、そこに居ることが当たり前前だと思っていたんです」

和華「……」

澄「だから、これは誰かの記憶なんじゃないかと」

澄「澄、和華を見る。

澄「あなたのことを好きなの、誰か」

澄「……和華、泣くのを堪える。誰か」

澄「……和華、泣くのを堪える。誰か」

和華「……和華、泣くのを堪える。誰か」

澄「……和華、泣くのを堪える。誰か」

澄「僕があなたを愛おしく思っていることが、何よりの証拠じゃないですか」

和華「……！」

和華の頬に一筋の涙。

○回想・マンション・リビング・二年前（夜）

和華「和華、（25）帰ってくる。」

和華「返事がない。」

和華「……」

和華「和華の携帯に滯から着信。
（出る）滯？ まだ帰ってない？」

○回想・滯の車・車内・二年前（夜）

滯「ごめーん、残業している。」

ある？ ケーキ買ったけど。何か欲しいもの
助手席にケーキの箱。

和華（声）「もう買ってんじゃん。あ、じゃあ
牛乳……」

滯「もうない？」

和華（声）「昨日使い切っちゃったみたい。お
願いしてもいい？」

滯「甘い物の時はいつもミルクティーだもん
ね。いいよ」

和華（声）「ありがと。気をつけてね」

滯「はい。またね」
電話が切れる。

○回想・マンション・リビング・二年前（夜）

和華、食卓に夕食を置く。

和華、玄関を見るが、滯が帰ってくる
様子はない。
和華、携帯を持って玄関へ。

○回想・同・前・二年前（夜）

和華、マンションから出てくる。

人がこぞって大通りへ向かって行く。
和華、大通りへ。

○回想・大通り・交差点・二年前（夜）

人だかりができています。

反対車線に横転している車。
ハザードが点滅している。

和華、滯に電話。
続くコール。

和華、人だかりの方へ。
留守電の音声が流れる。

和華「滯、今どこ？ 近くで事故があったみ
たいだから道を変えた方が――」

電柱に突っこんでいる車が見え、和華の言葉が途切れる。
立ち止まる和華、車に見覚えがある。
和華、野次馬を掻き分けていく。
ボンネットがつぶれて煙を上げている
いる。瀦の車。
和華、立ちすくむ。

○高層マンション・澄の部屋
和華「お願いなんかしなきゃあんなことには

……」

澄「あなたは悪くない」

和華「何も知らないくせに！」

澄「知ってます」

和華「……」

澄「知ってますよ」

○回想・瀦の車・車内・二年前（夜）

瀦、目を開ける。

耳鳴りと人の声が混ざる。

瀦、目を動かし、外を見る。

野次馬の中に和華を見つめる。

頬が緩む瀦、手を伸ばそうとする。

○高層マンション・澄の部屋

澄「最後にあなたの顔を見てよかったって、

きつと思ってます」

和華「嘘……」

和華、首を振る。

和華「勝手なこと言わないで……助けられ

なかったのに、そんなこと……恨まれて

当然なんです。瀦は手を伸ばしてくれたの

に、私は……動けなくて……」

澄、和華の涙を拭う。

澄「こうしたかっただけです」

和華「……」

澄「こんな好きなのに恨むわけない。それは

僕が証明に——」

和華「それは、瀦が、でしょう……？」

澄、手が止まる。

和華「雪村さんは私のことなんか好きでも何でもないですよ」

澄「何も言えない。
和華、部屋を出る。」

○マンション・リビング（夕）

和華「崩れるように床に座りこむ。
和華、静かに涙を零す。」

○総合病院・精神科・診察室

医師「問題なさそうですね。何か気になることはありますか？」

澄「はい、いえ、特には」
医師「そうですか」

澄「ちらつと看護師を見る。
そこにはありさが立っている。」

○同・廊下

澄「歩く。
ありさ「雪村さん」

澄「振り返る。」
ありさ「ありさ、かばんを持ってくる。」

澄「お忘れですよ」
ありさ「ありさをじつと見る。」

澄「ありさに重なる和華の面影。」
ありさ「すみません」

澄「ありさからかばんをもらう。」
ありさ「いいえ。お大事に」

澄「口を開くが、すぐに閉じてお辞儀。」

○高層マンション・澄の部屋

澄「和華に電話をかけている。
出ない。」

澄「電話を切る。」
× × × × × ×

熊居「先生？」
澄「はっとして、」

熊居「あ、はい」
熊居「お疲れですか？　ちよっと顔色悪いで

澄「すよ」

熊居「少し、考え事を」

熊居「最近出かかれてないですよね。ぱつと気晴らしされてはどうですか？ 長期連載の前」

澄「長期連載」

熊居「短期連載も問題なさそうなので、そろそろ完全復帰していただくか。あと、

澄「映画原案のお話も来てまして」

○マンション・和華の部屋

和華「布団にくるまっている。

澄「から電話が来る。待つ。

和華「切れるのを待つ。

澄「しばらくして電話が切れる。

和華「からメッセーヂが届く。

○同・部屋前（日替わり）

和華「ドアを開ける。

○同・リビング

和華「続いて澄が入ってくる。

澄「隣の部屋の戸を開ける。

和華「澄を見ている。

和華「隣の部屋の入り口を覗いてみる。

和華「冷蔵庫を開けてアイステイ」

澄「部屋から出てこない。

和華「卓に置き、座る。

和華「消える濡の面影。

澄「ありがとうございます。……つきまりましたか、はじめ」
和華「はい」
澄「そうですか。……じゃあもう――」
和華「和華の前に小さな箱を置く。」
和華「……何、ですか」
澄「箱を開ける。」
澄「結婚しましたよ」
和華「……何を言っている……」
澄「……和華を真っ直ぐ見ている。」
和華「……つきまじりましたよ。おかげさまで」
澄「この気持ちが前の人のものだったとしても、そのおかげで、僕は吉浦さんを好きになれたんです」
和華「だから、それは……」
澄「一緒に居て僕は幸せでした」
和華「……」
澄「始まりがどんなに歪だろうと、これは僕が思ったことです」
和華「何も言えない。」
澄「とつくの昔に捨てた結婚という選択肢を、あなたがくれたんです。それで救われるのは僕だけじゃない」
和華「！」
和華「手をぎゅっと握る。」
和華「アイステイラーのコップが汗をかいている。」
和華「指輪の箱に手を伸ばす。」
和華「箱に触れる。」
澄「見ている。」
和華「悩んだ末、箱を閉じ、澄の前へ。」
澄「僕が、男だからですか？」
和華「首を振る。」
澄「前の人と被りますか？」
和華「首を振る。」

澄「……好きじゃないから、ですか？」

和華「一瞬浮かぶ濡る。」

澄「じゃあ、どうして……？好き同士なら

和華「キスもできないのに、結婚生活が送れ

澄「……？」

和華「役所に行つて婚姻届けを出せば結婚は

できます。でもその後は何？子どもとか、

お互いの両親とか、問題はたくさんあるん

澄「できますよ、キスぐらい」

和華「（え……）」

澄「あなたと居られるなら、僕は神様だつて

和華「嫌……！」

椅子が倒れる。

アイスティーが広がっていく。

澄「どうしてわかつてくれないんですか……？」

和華「澄から離れた場所に立っている。」

澄「お互いがどれだけ貴重な存在かわかつて

るはずでしょう？好きなものが違つて

和華「それじゃ普通になるために利用して

澄「あなたに利用されるなら本望だ」

和華「濡るの気持ちを利用する。」

澄「……？」

澄「……？」

澄「……？」

澄「……？」

澄「いつになったら僕を見てくれるんですか」
和華「！」

澄「法律なんかいつまで経っても整ったりしないんです。世間の目だって温かくなりやしない。だったら僕らが変わるしかないでしょう」

澄、和華の手首を掴み、濡の部屋へ。
和華、抵抗する。
澄「嫌っ……やだ離して」

和華「アイスティーで足を滑らせ、転ぶ。」

澄、和華を起こそうとする。
和華、恐怖で体をびくつかせる。

澄の手の力が緩む。
和華、手首を引き抜く。

澄「ごめー」
和華「帰って」

澄「帰って！」
和華「帰って！」

澄、部屋を出て行く。
玄関が閉まる音。
食卓の上に指輪の箱が残っている。

○総合病院・精神科・診察室（日替わり）
患者と話す医師。
その後ろには鴨田。

○高層マンション・澄の部屋
暗い部屋。
原稿が床に散らばっている。

○出版社・漫画編集部
熊居、澄に電話をかけている。

熊居「おつかいなあ、いつもすぐ出てくれるんだけど……」
熊居、荷物を持って席を立つ。

○ 高層マンション・澄の部屋・前
熊居、インターフォンを押す。

返事がない。
熊居、澄に電話。
出ない。

熊居、もう一度インターフォンを押す。

熊居、「うーん」と悩み、かばんから合鍵を出す。

熊居「すみません、失礼します」

熊居、鍵を開けて中へ。

○ 同・部屋
熊居「先生？ 熊居ですけどー」

熊居、原稿に気づく。

熊居、「ええ……」と思いながら原稿を集め、歩く。

部屋の奥に横たわっている黒い影（澄）。
熊居、目を凝らす。

熊居「それが澄だとわかり、

熊居「先生！？」

熊居、原稿を投げて駆け寄る。

熊居「どうしたんですか！？ 先生！」

○ 総合病院・入口・前

熊居、電話をしている。

熊居「念のため入院を、はい。なのでもし

かしたら……はい、すみません。先生と

話をしてまた連絡します。失礼します」

熊居、電話を切って病院の中へ。

○ 同・階段
熊居「何階だっけ……」

そこに和華が通りかかる。

和華「和華、気づいて、

「どうされました？」

熊居、和華を見て、

熊居「あ」

和華、「あ」と。

○ 同・病室

和華「落ち着いたら、ちゃんと話しましょう。」

二人のこと」

澄「……わかりました」

○同・受付

順番を待つ人や受付を済ませる人。

○スーパー・店内

まばらにいる買い物客。

○動物園・園内

トラがあくびをする。

○駅前・ホテル

ホテルマンが客を迎える。

○大通り・交差点

車が走る。

○マンション・滯の部屋（朝）

カーテンが開けられた明るい部屋。
窓から入る風がカーテンを揺らす。

○本屋・店内（朝）

店員が漫画雑誌の付録を組む。
表紙に澄の絵と【新連載！】の文字。

○高層マンション・澄の部屋

和華、インターフォンを押す。

澄、ドアを開ける。

× × ×

和華、ソファーに座る。

澄、紅茶を置く。

澄「外でなくてよかったですか」

和華「お仕事、忙しいんですね」

澄「そうですけど……」

和華、紅茶を飲む。

和華「あ、美味しい」

澄、ほっとする。

澄、和華の向かいの床に座ろうとする。

和華「こつち」とソファアートをトントン。
澄「……」
澄「ソファアールに座る。
和華「部屋を見渡す。
以前と変わらない大量の本と画材、液
晶タブレット。
コーヒー器具の横に紅茶のポット。
和華「嬉しくなり、ほほ笑む。
澄「緊張した顔で目を伏せている。
和華「カッパを置く。
和華「謝りたいことがあって」
和華「私、結局どっちが好きかわからなかつたんです。濡である雪村さんに惹かれていたはずなのに、男性である雪村さんが居ることに安心してました」
澄「だから多分、両方好きだったんだと思
います」
和華「けど、ほっとして頷く。
和華「かばんから指輪の箱を出し、机
に置く。
和華「これはお返しします」
澄「あの時は謝ります。吉浦さん
が嫌なことはもう二度としませんから」
和華「あれは私が悪いんです。雪村さんがあ
あいうことをする人じゃないってわかって
たのにお詫言わせて」
澄「顔をしかめる澄、指輪の箱を見る。
の：あなたを僕のものにしたいと思つた
の：事実です」
和華「澄を見て優しくほほ笑む。
和華「お願いがあるんです」
澄「聞きたくないです」
澄「……」
和華「私は聞いたのに？」

澄「それ以外なら何でも聞きます」
和華「えー？ 笑って、じゃあ、いつか思い出を漫画にしてください。小さくていいのでちらつと」
澄「描きます。全部、吉浦さんが望むままに」
和華「嘘ですよ。雪村さんが描きたいものを描いているのが好きなんです」
澄「……」
和華「雪村さん」
澄「雪村さん」
和華「私と別れてください」
澄「嫌です……。好きなんです。あなた以外、考えられない」
和華「私もです」
澄「じゃあー」
和華「でも、濡とちやんとお別れしないと」
澄「言葉に詰まる。」
和華「濡が過去になって、初めて雪村さんと向き合えると思うんです」
澄「……」
和華「普通になりたいたいから一緒に居るんじゃないかって、世間や法律も性別も関係なく、あなたがいって、そう思える人と一緒に居たいんです。それが雪村さんなのか全く別な人なのか、今はまだわからないから」
澄「話そうとするが何も言えない」
和華「泣くの堪え、」
澄「別れて、ください」
和華「泣きそうに顔を歪ませる。」
澄「澄の手に触れる。」
和華「澄の顔を上げる。」
澄「はっと顔を上げる。」
和華「優しくほほ笑む。」
澄「堪えて、静かに頷く。」
× × ×
和華「玄関で靴を履く。」
澄「似顔絵はもらってもいいですか？」
和華「……ああ、あれ」
和華「最後のプレゼントでいいので」

澄「なら……」

澄、指輪の箱を取りに行き、戻ってくる。

澄「これも」

和華「それは……」

澄「婚約指輪とは比べ物にならない安物です」

和華、悩むが、受け取り、

和華「私は何もあげられなかったのに」

澄「たくさんもらいましたよ。思い出とか、

紅茶とか」

和華「そんなのでいいんですか」

澄「とても、大切なものです」

澄、ほほ笑む。

和華、ほほ笑む。

和華、ドアを開け、外へ出る。

風が和華の髪を揺らす。

澄、俯く。

和華、振り返り、

和華「澄さん」

驚く澄、顔を上げる。

和華「大好きです。さようなら」

和華、歩き出す。

玄関のドアが和華の姿を隠す。

澄、部屋から飛び出す。

○同・前

澄「和華さん！」

和華、振り返る。

澄「僕は一生、あなたのことが好きです。始

まりは借り物だったとしても、僕は確かに、

あなたを愛してました。この先、どんな選

択をしようかと、それは変わらない」

和華「……はい」

和華、歩いていく。

澄、見送る。

○映画館・前・二年後

T【二年後】

和華（29）、待ち合わせをしている。

ありさ（27）、手を振って和華の元へ。

○同・劇場

ありさ「ありさ、階段を上りつつ、緒に来てくれて。チケットが無駄になるところでした」

和華「私も、一人で行く勇気なかったから助かったよ」

ありさ「和華とありさ、席を見つけて座る。」

和華「あー、うんそう。ずっと好き」

ありさ「原案と監修やって、コミカライズも自分でするとかスゴ。超人ですか？ 公開に合わせて漫画発売とか洒落てるし」

和華「お供します」

ありさ「お供します」

和華「ありがとう」とほほ笑む。

照明が落ち、壇上にスポットライトが当たると。

舞台袖から俳優と監督が出てくる。

トクショーが始まる。

ありさ、楽しそう。

和華、ほほ笑ましく見ている。

主演俳優「それが」

監督「お、いいですよ」

主演俳優「題名の Dear Ling はダーリンの話源なんですって。ダーリンの意味はみなさんご存じですよね」

俳優1「あなた、とか」

主演俳優「そうそう、愛する人みたいな。そこで私気になって、ゆきむら先生に聞いてみたんですよ」

監督「何を？」

主演俳優「どうしてダーリンじゃなくて Dear Ling なんですかって。ダーリンの方が伝わりやすいんじゃないかと思ったので」

監督「あーなるほどね」

俳優2「それで、何て言われたんですか？」

主演俳優「これはかけがえない誰かの為に描いた物語だから、だそうです。恋愛の一方的なあなたへの愛じゃなくて、もっと大きくて深い想いがあると」

監督「いい話聞いちゃったなあ」
俳優1「届くといいですね」

主演俳優「ねー。見てますかー」

俳優や監督、笑う。

ありさ、笑う。

会場内のみんなが笑っている。

トークショーが終わり、映画が始まる。女性二人が楽しそうに過ぎ、幸せに笑っている。

和華との思い出を濛の目線で描かれているような内容。

ありさ「（小声）和華に気づいて驚く。

和華「（小声）大丈夫ですか？」

和華「（小声）大丈夫」

和華、涙を拭いながらほほ笑む。
和華の左の薬指に指輪。

終わり